

公園をみる・観る

= 近づく春 =

春は名のみの風の寒さやあ〜♪ 3月半ば、公園には歌の言葉どおり冬の名残りの薄青い空が広がり、時に思いがけず冷たい風が吹き抜けていく。しかし、日差しは明るさを増し、春への期待を充分に感じさせている。

今春、特に目を引くのは葦原の変。近年毎年行ってきたアシ焼きは今年も3月4日に予定されていた。しかし先に行われた秋吉台の山焼きで不幸な事故があったことから、安全対策の更なる見直しのため今年中止となった。今、焼かれなかったアシが散髪されない乱れ髪のように風に揺れている。

東の空き地にミサゴの人工巣台が出来たというので見物に出かけた。直径5cmの鉄パイプで組まれた巣台は頑丈でそのテッペンからは公園は勿論、阿知須全域が文字通り鳥瞰できるのでは無いかと興味津津、思わず登頂を試みたが（良い子は真似をしないでね）全く持って我が敵に非ずだった。レンジャーの話によるとこの巣台に最初にやってきたのはハシボソカラスだそうだ。やっぱりカラスは頭がいいだけに物見高い生き物なのかなあ。しかしカラスはすぐに飛び去り、しばらく人待ち顔をしていた巣台だったが、3月20日、一羽のミサゴが様子見にやって来てしばらく巣台に滞在した。気に入ってくれたかなあ、彼（たぶん）が気に入ってくれて愛の巣を作ってくれたらいいなと思う。

その巣台の近所にこれはまた不思議なこと、一株の水仙を発見。自然観察公園内に観賞用の花が咲いているとは。水仙は球根植物だから、種のように容易にトリが持ち込めるものではなく考えられることとして、この公園を造成する土の中にたまたま水仙の球根が混じっていてそれが長い年月に付いたのだろうという結論になる。何時の頃かははっきりしないが毎年花が咲いているという。水仙の花言葉は「自己陶醉」。ギリシャ神話に登場する美少年ナルキッソスは、ニンフのエコーの求愛を拒んだために水面に映る自分の姿に恋をするという呪いを掛けられた。叶わぬ恋にやつれ果てた彼は死んで水仙の花になり、死後もなお自分の美しさを自分で愛で続けたと言われている。目の前にある水仙もさぞ自己陶醉したのだろう大分お疲れの様子。少し肌寒くなったのでビジターセンターに帰ることにした。



途中ジョギングの人とすれ違った。温もるかもと真似して走ってみたが60mぐらいで息が上がりすぐ終了。今年はウグイスが早い時期からはっきりと元気に上手に囀っている。きっと良いパートナーが見つかるだろう。トンボ池の5本のイヌコリヤナギは小さい青芽を付け、ピオトープでは水面がブツブツ泡立ち生き物の生息を告げている。冬季に産み付けられた日本アカガエルの卵が孵化しオタマジャクシになったかな？近づく春を思って心の弾む今日この頃である。（土×土）